

研究論文

※公募により岡崎大学懇話会所属の研究者から寄せられた研究成果を掲載いたします。

【研究論文】

保育・教職を目指す学生が一般英語教科書を使用し、

SDGs の学習を行った際の学びについて

岡崎女子大学 宮腰 宏美

要 旨

本研究は、一般英語教科書のユニットをSDGsの目標と関連させ、ユニセフなどの動画を使用し、SDGsの学習を行った際の学生のSDGsや英語音声についての学びについて検証をした。

その結果、SDGsへの理解や現在世界が抱えている様々な問題への関心が上昇したとともに、個人差はあるものの、世界の問題を自分の事として捉えられるようになったと全員が回答する結果となったが、学生の英語についての印象にあまり変化は見られなかった。

1. 研究の背景と目的

岡崎女子大学では、2020年度より「インクルーシブ教育士」の資格取得制度が始まった。「インクルーシブ教育」の定義について中村(2019)¹⁾は、日本におけるインクルーシブ教育は、特別支援教育による多様な学びの場の整備によってインクルーシブ教育システムを構築しようとしているのに対し、世界では、持続可能な開発目標(SDGs)により「包摂的かつ公正な質の高い教育」という教育目標を示していると述べている。中村が指摘する「世界」における教育目標として、ユネスコの「Education Sector Technical Notes Inclusive Education」が挙げられている。中村は、インクルーシブ教育は、学生やコミュニティにおいて、多様性と様々なニーズ、能力や学習への期待を尊重しながら、全ての人に質の高い教育を提供することを目的とした継続的なプロセスで、あらゆる形態の差別を排除するものであるほか、1960年の「教育における差別待遇の防止に関する条約」およびその他の国際人権条約において、性別、民族的出身、言語、宗教、国籍、社会的出身、経済状態、能力など、社会的に起因または認識されている違いに基づく教育機会の除外または制限を禁止していると説明している。川口(2019, p. 162)²⁾も「インクルーシブ教育は、包括的な社会を形成するために重要な教育形態であると標榜されており、SDGs4に関する議論だけではなく、SDGs全体に資する教育形態になりうる。」と示しており、インクルーシブ教育が広い意味での教育を指していることが示唆されている。

筆者が勤務する大学における「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」の授業は、小学校、幼稚園、保育免許取得を目指す1年生の必修科目であり、上述した「インクルーシブ教育士」取得の必修科目として位置づけられているが、授業で使用している教科書は総合的な英語力を身につけるための教科書であり、「イギリス文化理解を日本との比較の視点から捉えたエッセイをコアにして、社会と娯楽、文化と環境、ビジネスと生活、教育と技術の4つのジャンル」についてのリーディング、ライティング、リスニングで構成している(Terry・三原・立本・木村, 2017, p. 5)³⁾。インクルーシブ教育士取得の必須科目としての役割を果たすことを目的とし、本研究は、それぞれのUnitのトピックとSDGsの目標およびその内容を関連付け、国連広報センターなどの英語音声の動画を教材として扱うことで、英語の学びを確保しながら、学生がSDGsについて学ぶことが可能であるかどうかについての研究を行った。

2. 先行研究のレビュー

(1) 英語授業における SDGs の取り組みについて

伊東(2019)⁴⁾は、「英語で学ぶ国際問題」の授業において、東海大学の教養学部国際学科の2年生に対し、英語を使用してSDGsを取り入れたところ、英語とSDGsの内容を使い両者を同時に学ぶことは容易なことではないという結論に達したと述べている。

阿部(2020)⁵⁾は、八戸高専の2~3年生(英検準2級以上、またはTOEIC400点以上)がニュージーランドのオタゴポリテクニクへ学生達が留学をした際に、現地での研修内容をSDGsに重点をおいたものにしたところ、英語に対しては学生の英語への抵抗感が減ったこと、英語を使うという積極性や行動力の向上において変化が見られたと報告している。また、英語で行ったSDGsに関する学習については、学習内容の100%~80%を理解できた学生が全体の43%で、79%~60%理解できた学生が全体の43%であったと述べている。更に、ニュージーランドで学んだこと自体が、日本にいると気がつかなかった日本の問題点などに気づくことができたという意見もあったと報告している。

山野と天沼(2019)⁶⁾は、宇都宮大学教育学部の1~3年生10名がマレーシアの短期海外英語研修へ行った際に、サラワク大学コミュニケーション学部の現地教員にSDGsおよびマレーシアにおける多民族・多文化理解につながるテーマ学習を行ってもらい、学生の学習発表活動として、SDGsのいずれかの目標に関わる発表をグループ毎に英語で行ったところ、学生の自己評価として、アンケートに回答した全員が英語の聞く力・話す力が身に付いたと答えたこと述べている。また、特にボルネオ島の自然環境や現地の生活事情、教育を体験したことを元に、自己のSDGsの理解と結びつける重要性について、学生が学んだと報告をしている。

海外留学でのSDGsの学習では、体験的に異文化理解を学ぶことができることから、SDGsの学びとして効果的であるが、一般英語の授業において、SDGsの内容理解を取り入れる際には、保育学・教育学を専攻する学生に対するSDGsの内容提供においては、日本語を使った実践を取り入れたいと考える。

(2) オーセンティックな英語リスニングについて

小林(2006, p. 29)⁷⁾は、英語の習得には、語彙・構文が調整されたり、原文を書き換えた教材用素材だけでなく、ネイティブ・スピーカーに向けられた妥協のない生の素材に触れることが大切であると述べ、オーセンティックな教材の定義として「『ネイティブ・スピーカー向けの』『教育を目的としない』『自然な言語体の』性質を帯びた素材を使用して作成されたものを指す」と説明し、素材の例として映画やラジオ、ニュースなどを挙げている。

倉林(2017)⁸⁾は、映画を英語教育に利用することへの有効性について、学習者の集中力と興味を持続、オーセンティックな教材、異文化理解・国際理解を挙げており、オーセンティックな英語としての映画の有効性について、映画で話される英語はスピードや発音ともにネイティブ・スピーカーが実際に話すものに近く、学習用に作られた音声に比べてはるかに実用的であること、異文化理解や国際理解については、社会言語的に実際の文化を疑似体験することができることを説明している。

菊地と中山(2006, p. 262)⁹⁾は、中学3年生に対して外国語映画のスポットディクテーションを題材にした授業を行ったところ「外国映画によって提供される『生きた』英語と、文脈化・好奇心・挑戦などの要因は、リスニングに対する学習者の内発的興味を高め、積極的な取り組みを促すことが確認された」ことを報告している。

平野と松本(2011)¹⁰⁾は、学生に映画を用いてTOEICのリスニング指導を行った結果、学生が

予測しながらリスニングを行うようになること、口語表現や慣用表現の理解が増加することなどについての有用性について示唆している。

本稿で使用する国連広報センターや UNICEF で作成されている動画教材は、上述されているようなネイティブの映画俳優などが台本を元に演技している訳ではなく、開発途上国において現地の人々へのインタビューなどが交えられていたり、英語を第2外国語として話す人々が出てくることから、言語的にも多文化理解的にもよりオーセンティックな教材であると考えられる。

3. 対象と方法

(1) 研究の目的

本研究は、一般英語教科書の Unit のトピックと SDGs の目標およびその内容を関連付け学習をし、国連広報センターやユニセフなどの SDGs に関する動画視聴などを通じた、学生の SDGs や英語音声についての学びについての研究を行う。

(2) 調査対象と質問紙調査

調査対象は、岡崎女子大学子ども教育学部子ども教育学科の1年生で、2021年度後期授業「英語Ⅱ」を受講した31名であった。SDGsに関する学習の前後に、無記名での質問紙調査を行った。事前調査の項目は(1)希望職種 (2)現在世界が抱えている様々な問題への関心について(4件法) (3)現在世界が抱えている様々な問題についての知識について(自由記述) (4)SDGsについて知っているか(2件法) (5)SDGsについて説明できるか(4件法) (6)SDGsという言葉聞いたことがあるか(2件法) (7)SDGsについて授業を受けた経験はあるか(2件法) (8)SDGsについての印象(自由記述)であった。事後調査の項目は(1)希望職種 (2)現在世界が抱えている様々な問題への関心について(4件法) (3)現在世界が抱えている様々な問題についての知識について(自由記述) (4)SDGsについて知っているか(2件法) (5)SDGsについて説明できるか(4件法) (6)SDGsという言葉聞いたことがあるか(2件法) (7)SDGsについて授業を受けた経験はあるか(2件法) (8)国際的な問題を身近に感じ、自分にも関わる問題として捉えられるようになったか(4件法) (9)沢山動画を見たことによる、英語についての印象の変化(4件法) (10) (9)で変わったと回答した人の理由(自由記述) (11)英語の授業を通してSDGsを学んだ感想(自由記述) (12)身近にできるSDGsの活動(自由記述)であった。

質問紙調査は、第1回目の授業と第11回の授業時に行なった。

4. 研究方法について

英語Ⅰ及び英語Ⅱの授業では、English Indicator2という一般的なテキストを使用している。英語Ⅰの授業では、Unit1:Our Aging Society(いたって多趣味で元気な高齢者)、Unit2: Holiday Memories(幼いときのほろにがい思い出)、Unit3:Sport(卒業後も続けるスポーツ)、Unit4:Foreign Workers(孤立するか融合するか?)、Unit5:Lifestyles(若者が夢見る未来は?)、Unit6:Sizes(量と質のどちらが嬉しい?)を扱い、英語Ⅱでは、Unit7:Bathrooms(シャワーと風呂の文化の違い)、Unit8:Weather and Global Warming(白い氷河が灰色に変化)、Unit9:Recycling(リサイクルの積極的な取り組み)、Unit10:Commuting(通勤電車で快適に過ごす方法)、Unit 11:Crumbling Britain(崩れ落ちるままの崖)、Unit12:Advertising(購買欲を刺激する広告)を扱った。テキストは、読解、文法、リスニング等から構成されており、授業自体は、通常通り行い、読解を扱った授業の90分授業のうち、最後の10分から15分程を使い、毎回SDGsの学習を行った。表1は、それぞれのUnitに対してSDGsの目標を対応させたものである⁽¹⁾。

英語Ⅰにおいても表1の通り、英語のテキスト授業に対応させてSDGsについての学習を行った。英語Ⅱを受講した6割の学生の中は、前期で英語Ⅰを受講している。

SDGsに関する学習は、公益財団法人日本ユニセフ協会等の動画等を使用し⁽²⁾、主に英語音声、日本語字幕のものを使用した。学生が動画を見た後に、授業者からの視点を述べたり、学生同士が話し合い、発表をしたりした。

表1:各使用教科書のUnitとSDGsの目標の対応表

Unit	SDGsの目標
Unit1	3. すべての人に健康と福祉を
Unit2	14. 海の豊かさを守ろう
Unit3	4. 質の高い教育をみんなに
Unit4	10. 人や国の不平等をなくそう
Unit5	8. 働きがいも経済成長も
Unit6	1. 貧困をなくそう 2. 飢餓をゼロに
Unit7	6. 安全な水とトイレを世界中に
Unit8	13. 気候変動に具体的な対策を
Unit9	12. つくる責任 つかう責任 5. ジェンダー平等を実現しよう
Unit10	9. 産業と技術革新の基盤をつくろう
Unit11	11. 住み続けられるまちづくりを
Unit12	7. エネルギーをみんなに そしてクリーンに

5. 分析方法

事前調査では、質問項目8項目中、(1)、(2)、(4)～(7)については単純集計を行ない、(3)、(8)については自由回答からテキストマイニング(ユーザーローカル テキストマイニングツールによる分析 <https://textmining.userlocal.jp> を使用)を行なった。事後調査の項目は、(1)(2)、(4)～(9)については単純集計を行ない、(3)、(10)～(12)については、上述のテキストマイニングツールによる分析を行なった。

6. 結果の詳細について

上述したとおり、本学学生は保育者及び幼稚園教諭、小学校教諭を目指す学生が多く、2回行った質問紙調査の平均では、15.2%が幼稚園教諭、66.1%が保育士、18.7%が小学校教諭、8.4%がその他(児童養護施設や乳児院)を希望する結果となった。

(1) SDGsについての学びと、現在世界が抱えている様々な問題に対する関心について

質問項目(4)「SDGsを知っていますか」には、学習前に「知っている」が73.3%であったものが、学習後には、96.6%となった。質問項目(5)「SDGsについて説明できますか」には、「できる」が、学習前が10.0%であったものが、学習後には13.8%に増加し、「少しできる」が36.7%から58.6%に増加したことから、毎回10分から15分程度、主に動画による学習を通したSDGsに関する学びが確認された。

質問項目(2)「現在世界が抱えている様々な問題について、関心がありますか」という質問に

ついて、学習前には、「とても関心がある」が0.0%、「まあ関心がある」が73.3%、「あまり関心がない」が20.0%、「関心がない」が6.7%であったのに対し、学習後には、「とても関心がある」が17.2%、「まあ関心がある」が72.4%、「あまり関心がない」が10.3%、「関心がない」は0%となった。学習前を比べて、「とても関心がある」が17.2%増加、「まあ関心がある」が0.9%減、「あまり関心がない」が9.7%減、「関心がない」が6.7%減となり、SDGsに関する学習の前後で世界が抱える様々な問題についての関心を高めたこととなった。また、この件に関し、質問項目(11)の自由記述を「ユーザーローカル」のAIテキストマイニングを使用し、分析したところ、表1のような結果となった。

表1. 英語の授業を通してSDGsを学んだ感想のテキストマイニング(スコア/出現頻度)

名詞	世界 (1.16/11)	問題 (0.95/11)	動画 (0.17/5)	SDGs (38.58/4)	様々 (1.49/4)	日本 (0.13/4)
	身近 (1.20/3)	地球 (0.68/3)	色々 (0.42/3)			
動詞	思う (0.16/17)	知る (0.57/15)	できる (0.13/10)	いく (0.05/5)	考える (0.05/4)	受ける (0.12/3)
	困る (0.11/3)	いける (0.04/3)	見る (0.04/3)			
形容詞	良い (0.02/4)					

単語では、「世界」と「問題」が頻出され、具体的には、「世界の現状」「世界には」「世界の事」「色々な問題」「たくさん問題がある」「問題について知る」等のフレーズが挙げられていた。文章としては、「世界の色々な状況を動画で見れてよかった」「高校よりも動画を見るが多かったので、分かり易かった。」「日本の中だけでもたくさん問題があるけど、世界を見ると、どこもかしこも問題だらけだと思った。」「世界には、まだまだ色々な問題が解決されていなくて、このまま今の生活をしていたらやばいと思いました。」「アフリカあたりで水、食糧難が起きていることをあまり知らなかったけど、授業で聞くことができて良かったです」「SDGsを学習して、アフリカの地域と日本との差に驚きました。もっともっとそういう国に、してあげられることがあるのではないかと思います。」等の記述があり、動画視聴を通して世界状況への学びを深めたことが確認された。

(2) 世界との自分の繋がりについて

質問項目(8)「授業を通して、世界の問題を自分の事として捉えられるようになりましたか」については、「とても捉えられるようになった」が31.0%、「まあ取らえられるようになった」が51.7%、「少し捉えられるようになった」が17.2%、「以前と変わらない」が0.0%という結果となった。(11)の自由記述には、「今までSDGsなんて知らなかったけど、地球の色々な問題が身近に感じるようになった。」「SDGsは授業を受ける前は聞いたことがあるくらいだったけれど、毎回の動画や先生からの説明を受けて少し身近なことだと思いました。」「私にできることが少しでもあるのかなあと身近に感じた」等が見られ、世界の問題が身近に感じるようになったことが確認されたほか、「貧困によって生活の安定を図ることが難しい世界各国での現状を動画

を通して学ぶことができた。今、私たちができることは何か真剣に考えていく必要があると思いました。」「世界には様々な問題があって、日本では考えられない世界があるというのがわかりました。SDGs についてもっと詳しく知っていきたくて考えました。」「世界の様々な国で起きている問題について知ることができました。気温の問題や教育が受けられない地域の子どもの問題など自分達に何ができるのか、考えないといけないと思いました。」等、関心が増したことにより、今後更に自分で取り組んでいきたいという考えが伺われた。

(3) SDGs に関する様々な動画を英語で鑑賞したことによる、英語の捉え方への変化について 質問項目(9)「SDGs に関する英語の動画を観て、英語についての印象が変わりましたか」という問いには、「変わった」が 34.5%、「変わらない」が 20.7%、「どちらとも言えない」が 44.8% という結果となった。

様々な人種が使用している英語やアクセントの違いなどを、動画を通して聞くことにより、ワールドイングリッシュの視点をもつことができたり、オーセンティックな英語を学ぶことの意義に気づいたりすることを期待していたが、実際には、様々な英語を目にしても「変わらない」「どちらとも言えない」と答えた割合が 65.5%と高く、意識を変えることができなかった。しかし、(10)の自由記述には、「意外と理解ができた。少し身近に感じるようになった。」「以前より英語が聞きやすくなった。」「日本だけじゃなくて、世界に目をけられるようになった。」「楽しくなった。」、質問項目(11)の回答には、「英語で話している動画もたくさんあって、自分が英語を理解できるようになったらもっと見れるものが増えるのかなと思った。」との記述があり、かなり少数ではあるが、動画で使用されている実用的な英語に触れた影響を受けた学生も確認された。

(4) 身近にできる SDGs 活動について

質問項目(12)「自分が身近にできる SDGs 活動はどういったことがあると思いますか?」の学生の自由記述による回答には、募金が 7、節水が 6、節電が 5、ごみ拾いが 4、ごみの分別が 4 であった。その他、ごみを減らす、ポイ捨てをしない、無駄遣いをしない、リサイクル、マイボトル、マイバッグ、食べ残しをしない、海を汚さない、寄付、制服をあげる、SDGs について考える、ペットボトルのキャップ集め、その国に行って活動のお手伝いをする、ジェンダーについて考える、LGBT の人への理解を深めること等が記載されていた。質問項目(11)の自由記述には、「地球上で、知らないだけで、すごく困っている人が沢山いることを知れた。少しでも助ける手伝いをしたい。」「まだまだ知らないことがあって、遠いところで苦しんでいる人たちがいるんだなと思いました。」「自分の知らなかったことがたくさんあった。知っておくことが大切だと思った。」等の記載が見られた。本研究における SDGs の学習は、英語授業の一環であることから、世界における様々な状況に置かれている人々を扱った動画を扱ったため、学生の感想には、「世界の」というワードが散見されたとともに、世界の状況を見ることで地球上には、様々な状況に置かれている人を理解したと推測する。

保育職、教育職に就いた際には、外国籍の人々との関わりのほか、家庭環境や経済状態など、様々な状況に置かれている日本人の親子との関わりが予想される。世界には様々な人がいることを知った上で、日本にも同じように様々な状況に置かれている人がいることを学んでいくという、次の段階を示すことが今後の課題となる。

7. まとめと今後の課題

本研究は、保育、教育を学ぶ学生が一般英語教科書を使用した英語の授業において、一部教科書の内容と関連をした SDGs について主に動画を通して学ぶことを通した、SDGs について学びの検証を行った。

結果として、SDGs の内容理解および現在世界が抱えている様々な問題についての関心についての学生の自己評価が上昇したとともに、個人差はあるものの、世界の問題を自分の事として捉えられるようになったと全員が回答する結果となった。

第二言語として話す英語やオーセンティックな英語を学ぶことの意義に気づいてもらうことを期待し、SDGs を学ぶ際に、国連広報センターやユニセフの動画を英語で視聴したが、学生の英語についての印象は 65.5%の学生は変わることはなかった。しかし、少数ではあるが、ノン・ネイティブ・イングリッシュ・スピーカーの英語に触れた影響を受けた学生も確認された。

以上のことから、一般英語教科書を使用しても 1 回の授業あたりに 10 分～15 分程度の英語音声（日本語字幕）動画を使用することにより、SDGs への理解が深まったことが確認された。また、オーセンティックな英語の使用により、より広い意味で英語を捉える勉強にも繋がると信じたが、十分な結果を得ることはできなかった。

今後の課題として、広く SDGs の目標を扱うのではなく、岡崎女子大学のインクルーシブ教育との連携を図り、相互的に作用するような内容を厳選することにより、より英語そのものに力を入れることで、英語の動画を扱う意味づけを行う方向へ焦点を絞っていきたいと考える。

付記

本研究は、令和元年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会による研究倫理審査 No. 79 の承認を受けて実施している。

注釈

- (1) SDGs 目標 15、16、17 は今回扱わなかった。
- (2) 視聴した動画は参考文献に記載。

引用文献

- 1) 中村信雄「インクルーシブ教育の視点による学校教育の変革の可能性について-ユネスコのインクルーシブ教育の理念と実践について」『東京理科大学教職教育研究(4)』、2019 年、119-128 頁
- 2) 川口純「インクルーシブ教育」北村友人・佐藤真久・佐藤学(編)『SDGs の時代の教育』、学文社、2019 年、162-175 頁
- 3) Terry O' Brien・三原京・立本秀洋・木村博是『English Indicator2』、南雲堂、
- 4) 伊東弥香「SDGs をジブンゴト化する-CLIL の枠組みで考える英語教育」『東海大学教育開発研究センター紀要(3)』、2019 年、15-25 頁
- 5) 阿部恵「技術英語と持続可能な社会スタディキャンプ in ニューージーランド」『八戸工業高等専門学校紀要(54)』、2020 年、1-4 頁
- 6) 山野有紀・天沼実「マレーシア短期海外英語研修報告—研修および教育学部参加学生に対するアンケート調査の結果から—」『宇都宮大学教育学部教育実践紀要(6)』、2019 年、501-508 頁
- 7) 小林敏彦「オーセンティックな英語リスニング教材開発の理論と実践—データ収集からハンドアウトの作成と教授法まで」『小樽商科大学人文研究(112)』、2006 年、27-110 頁

- 8) 倉林直子「映画を利用したリスニングの授業に関する一考察」『川村学園女子大学研究紀要(28-1)』、2017年、33-46頁
- 9) 菊地一彦・中山勘次郎「外国映画のリスニングが中学生の学習意欲に及ぼす影響」『教育心理学研究(54-2)』、2006年、254-264頁
- 10) 平野順也・松本知子「映画を利用したリスニング指導：総合的な英語力を目指して」『映画英語教育研究紀要(16)』、2011年、91-103頁

参考等文献

- ・SDGs 支援機構「SDGs ジャーナル」<https://sdgs-support.or.jp/journal/category/17goal/>(2022年2月17日最終閲覧)
- ・NHK「2100年 地球のミライ」
<https://www.nhk.or.jp/special/plus/videos/20210105/index.html>(2022年2月17日最終閲覧)
- ・環境省「2100年未来の天気予報」
<https://ondankataisaku.env.go.jp/coolchoice/2100weather/>(2022年2月17日最終閲覧)
- ・公益財団法人日本ユニセフ協会「UNICEF SDGs CLUB」
<https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/>(2022年2月17日最終閲覧)
- ・国連広報センター「ビデオ」
https://www.unic.or.jp/texts_audiovisual/audio_visual/videos/(2022年2月17日最終閲覧)
- ・TREE Inc.「SDGsTV」https://sdgs.tv/tg_mov/goal3(2022年2月17日最終閲覧)